

東奥日報
2019年(令和元年)10月26日土曜日(20)



環境問題 触れて理解

マイクロプラスチック

児童生徒、海辺で採取

生物に与える影響学がぶ

八戸

マイクロプラスチックによる環境問題について考えてもらおうと、八戸工業大学と国立研究開発法人海洋研究開発機構(JAMSTEC)は22日、八戸市水産科学館マリエントで環境学習教室を開いた。市内の小学生と高校生計23人が、海辺でマイクロプラスチックを採取するなどして環境問題への理解を深めた。(工藤俊介)

八工大、JAMSTECが教室

同大土木建築工学科の橋詰豊准教授(工学)らが講師を務めた。同科の外山日世孝さん(4年)は、環境中に存在する微小なプラスチック粒子であるマイクロプラスチックが生物に与える影響などを紹介。「世界



【写真上】木片などと一緒に採取されたプラスチック片【同下】砂と海水を混ぜる「比重分離法」でマイクロプラスチックを取り出す子どもたち

の海で多数検出されると説明。プラスチック工場の近くは海洋環境が悪化しているとし、「八戸は首都圏に比べてマイクロプラスチックは少ない」と述べた。児童らはグループごとにマリエント前の海辺で砂を採取し、海水と混ぜてマイクロプラスチックを取り出す「比重分離法」に挑戦。重量が軽い木片や海藻に隠れた小さきまなプラスチック片を見つけると、児童らは「マイクロプラスチックがあった」「すごく小さいものを見つけたよ」などと歓声を上げていた。多賀台小学校6年の古里友愛さん(12)は「いろいろな大ききのマイクロプラスチックが砂に混じっていた。ごみのポイ捨ては絶対にしてほしいようにし、これからも環境問題について考えたいです」と話した。

※ 「この画像は当該ページに限って東奥日報社が利用を許諾したものです」